
学校をつくろう！～New Legend（ニュー・レジェンド）～

カナザキケイスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校をつくろう！〜New Legend〜
ニュー・レジェンド

【Nコード】

N4239Z

【作者名】

カナザキケイスケ

【あらすじ】

2011年の12月。都内の有名進学高校に、教育実習生として“ある1人の少女”がやってきた。その少女の登場とともに、大きな騒動の幕が上がる…。

作者が初公開したオリジナル長編戦国アクション小説『戦国乙女（第1章）』に登場した女性教師のスピノフ！

作者が学生時代に書いたオリジナル小説を元に大幅リニューアルした、オリジナル学園コメディ小説ついに初登場！

(元々、1話完結の短編読み切り作品として制作していましたが、容量や文字数、ストーリーの関係上、分割して公開することにしました。また、この作品は、作者のYahoo!ブログやmixi日記でも不定期連載中です)

【その1】 とんでもないヤツがやってきた！（前書き）

この作品はフィクションであり、人物、事件、団体名などは一切関係ありません。なお、一部の人物は、実在する人物をモデルとしていますが本人とは関係ありません。

この作品は、一般的な小説スタイルとは異なる独自のスタイルを採用しています。

【その1】 とんでもないヤツがやってきた！

近くで小鳥が鳴いている。バイクや車が、時折通り過ぎていく音も聞こえる。外で誰かがランニングしている音も聞こえる。そして、私の部屋にある目覚まし時計も激しく鳴っている。その回数、既に3回。

もう朝か…。

私は、俯せ寝の状態で枕に顔を押し付けていた。そして、ゆっくりと右手を布団から出し、うるさい目覚まし時計を自分の右手と直感だけを頼りに探した。なかなか見つからない。しばらくして、やっと右手が目覚まし時計に触れ、そのままスイッチを押して不快音を止めた。

部屋には沈黙が流れる。だが、私は目覚まし時計に手を伸ばしたまま、ピクリとも動かない。

4回目の不快音が鳴った。けれど、右手が既に目覚まし時計のスイッチに触れたままなので、すぐに止めた。それでも私の体は動かない。

意識は、2回目の不快音が止まった直後から2割ほど起きている。でも、あまりの眠気の強さと寒さで温かい布団から出たくないのだ。この温かい布団は、まるで夢の国だ。温かくて心地よい。良い夢を見させてくれた。だけど、この布団から一歩外に出るとそこは現実だ。もうしばらく夢の国にいさせて欲しかった。でも、現実に戻るしかない。

私は、手を布団の中に戻し、そして俯せの状態から仰向けの状態に変えた。まだ、ぼんやりとした意識だが、目の前には白い天井が見える。

【?????】「…起きるか。」

私は、ベッドからようやく出た。そして、不快音が4回も鳴った目覚まし時計を見る。朝の6時を少し過ぎた頃だ。いつも通りだ。

次に私は、目覚まし時計のすぐ左隣にある写真立てに目を移した。その写真には、私とある男性のツーショット写真だ。某有名テーマパークで撮影したもので、2人とも笑顔だ。私は、その写真に写っている男性を見て、少し顔を赤らめニコツと笑顔を見せた。

【?????】「おはよう。」

と、私はその男性に向かつて言った。ちよつと体が温かくなる。今朝は良い夢を見させてくれたし。

その時、私の体がブルつと震えた。

【?????】「寒ッ！」

私は、部屋のカレンダーに目をやった。今日から12月だもの。薄着のパジャマだし、寒いわけだ。

【?????】「…着替えよう。」

私は部屋を出て洗面所で顔を洗い、自室に戻って、少し化粧をして、パジャマを脱ぎ、上に白い女性用のYシャツ、下はストッキングを着いた上に黒いスカートを着た。これで上に黒い女性用のスーツを着れば着替えは完了だ。でも今日は12月の始めということもあり、長い黒髪を束ねてクイックアレンジを試してみた。そして、自分の姿を鏡を見た。

【?????】「…うん、完璧！」

私は、^{ひろさわみず}広沢美咲。26歳独身のうお座のA型。都内の有名私立高校で教師として働いている。今年の春から、念願だったクラスの担任を任されている。と言っても、まだまだヒヨツ子。ようやく慣れてきたけれど、大変なものには変わりない。

身支度を終わると、私は朝食を食べるため1階に降りた。

リビングに向かうと、まずソファに座りながら朝刊を読んでいる父の姿が目に入った。

【広沢美咲】「おはよう、お父さん。」

【?????】「おう、おはよう。」

父は、私よりも新聞の内容が気になるようで、新聞を読んだまま私に挨拶を返した。でも、それがいつもの父なので、私は気になら

なかった。

広沢健吾ひろさわけんご。それが父の名前。一家の大黒柱で、都内で商社に勤めるサラリーマンだ。優しいときが多いけれど、怒ると怖いときもある。

【?????】「美咲、早くご飯食べちゃいなさい。お父さんは、もう食べ終わっているんだから。」

【広沢美咲】「はあ、い、お母さん。」

台所で食器を洗っている母の広沢恵美ひろさわえみ。病院の事務員だ。忙しいのに、家の家事なども全てこなす。時々、私も手伝ったりしているんだけどね。

私は食卓の自分の指定席についた。食卓には、既に私の朝食が用意されていた。その反対側には、朝食中の弟がいた。

【広沢美咲】「おはよう、恭祐。」

【広沢恭祐】「・・・。」

恭祐は、ご飯に食べるのに夢中で返事をしようとしないう。そこは父に似ている。

広沢恭祐ひろさわきょうすけ。私の弟で大学生。年は4歳ほど離れている。幼いころから仲が良いけど、根は優しいが生意気なところも多々ある。

【広沢美咲】「いただきます。」

私は、朝食をはじめた。

【広沢美咲】「恭祐、大学は順調？」

【広沢恭祐】「まあね。お母さん、おかわり。大盛りで。」

【広沢恵美】「はいはい。」

母は、恭祐から茶碗を受け取り、多めにご飯を盛ると、恭祐に返した。

【広沢美咲】「朝からよくそんなに食べられるわね。」

【広沢恭祐】「今日までにレポートを仕上げる必要があって、徹夜でやっていたら、お腹空いちちゃってさ。」

【広沢美咲】「まったく・・・。」

【広沢恭祐】「・・・ところで、姉ちゃん。」

【広沢美咲】「何よ。」

【広沢恭祐】「のんびり朝食をしているけれど良いの？ 急がないと、遅れちゃうよ。」

【広沢美咲】「大丈夫よ、まだ朝7時前だわ。朝7時30分のバスマで余裕がある…。」

そう言いながら、私は近くにあった時計を見た。その時計の針は、朝7時20分だった。

【広沢美咲】「に、20分!? なんで!?!」

私は自分の目を疑った。確かに、私の部屋を出るまで目覚まし時計は朝7時前だった。すぐに私は自分の携帯の時間を見た。朝7時21分が変わった。

【広沢恭祐】「もしかして姉ちゃん、自分の部屋の目覚まし時計を見てやって来た?」

【広沢美咲】「そ、そうだけど…。」

【広沢恭祐】「あの目覚まし時計、実は20分遅れているんだ。」

【広沢美咲】「…え?」

【広沢恭祐】「いや、正確に言えば“遅らせた”かな。」

【広沢美咲】「…どうということよ、恭祐。」

【広沢恭祐】「徹夜でレポートを作っていると、途中で飽きちゃつてさ。自分の部屋にいてもつまらないから、姉ちゃんの部屋に夜中忍び込んで、目覚まし時計の時間を少しばかりイジらせてもらったんだ。だから、目覚まし時計と実際の時間は20分違う。今は朝7時22分、…あ、23分になるか。」

恭祐から思わぬ事実を告げられた私。私の体の中で、サーツと何かが静かに冷たく流れた感じがした。

プルプル震える私の横で、恭祐はおもむろに自分の携帯を取り出して少し操作をしたかと思うと、私にその携帯の画面を見せた。

【広沢恭祐】「はい、これが証拠の写真。」

見せたのは、私の寝顔とその横で恭祐がニヤニヤ顔でピースしている画像だった。画像には日時が入っていて、それは夕べの時間だ

った。

【広沢恭祐】「それにしても、姉ちゃん、なんて寝顔をしているんだ。ヨダレ垂らしているし、何の良い夢を見ていたんだろう？もしかして…。」

と、私の顔を見ながらニヤニヤ顔で言った。私は顔が真っ赤になった。

【広沢美咲】「け、消しなさい！」

【広沢恭祐】「いやだよ。ツイッターに載せるんだから。」

【広沢美咲】「勝手に載せないでよ！！」

【広沢健吾】「朝っぱらから暴れるな！ 飯の最中だろ！！」

父の鬼の一喝が入り、私と恭祐は静かになった。そして再び食事に入った。

【広沢恵美】「…それよりも、美咲。ジ・カ・ン。」

私はハツとした。

【広沢美咲】「そうだった〜ッ！！」

私は急いでリビングを飛び出し自分の部屋に戻ってカバンと持ち出し、すぐに玄関に向かった。靴箱から黒いヒールと取り出し履こうとした時、ふと何を思ったのかりビングに戻って言った。

【広沢美咲】「恭祐。その画像、絶対に消しときなさいね！！」

【広沢恭祐】「ジ・カ・ン」

【広沢美咲】「行ってきます！」

私は、家を飛び出した。

【広沢恵美】「気を付けて行ってくるのよ。」

【広沢健吾】「まったく、何をやっているんだ、美咲は…。担任教師が聞いて呆れる。」

【広沢恵美】「貴方も遅れるわよ！」

と、お玉でパコツと頭を叩いた。

【広沢健吾】「そうだった〜ッ！！」

と、慌てて家を飛び出した。

【広沢恵美】「まったく、うちの人ときたら2人揃って…。」

【広沢恭祐】「今日も朝から広沢家は賑わいですな。平和だ、平和だ」

と、嬉しそうにご飯を食べ続ける。

【広沢恵美】「アンタのせいでしょ。」

【広沢恭祐】「おかわり〜」

【広沢恵美】「セルフサービス。」

【広沢恭祐】「えっ!？」

いつもではないけれど、私の平日の朝は、こんな感じだ。

【広沢美咲】「まったく、アイツは…!!」

私は文句を言いながら、走ってバス停を目指した。朝7時30分に出るバスに乗るためだ。でも実は、このバスに乗らなくても間に合ったりする。けれど、私にとっては、このバスでなければならぬのだ。

しばらくして、バス停にたどり着いた。数人ばかりバスを待つ人が見える。

【広沢美咲】「ま、間に合った〜。」

朝から全速力で、もうヘトヘトだ。今日1日、体力もつかない…。

【?????】「あ、おはよう、美咲ちゃん。」

私は、男の人に声を掛けられた。その姿を見たとき、私のヘトヘトは一瞬にしてどこかへ消え去った。

【広沢美咲】「お、おはよう、金ヶ崎君。」

この人は、金ヶ崎慶介かながさきけいすけくん。私のベッド脇にある写真立てのツーショット写真の相手だ、金ヶ崎君は知らないけれど。彼は伊豆の出身で、同じ大学で知り合った仲。一度は都内の会社に勤めていたが退職して地元に戻り、地元で少し働いていたあと、私の近所に最近引っ越してきた苦勞人。この間にも大学時も、よく色々な場所に2人で遊びに行ったりもしている。相手はどう想っているのか分から

ないが、私にとってはこの世で最も大切な人。彼は、いつもこの時間のバスに乗って仕事へ向かうのだ。それを私が偶然を装って乗るわけ。

出会ってから数年も経つのに“私の彼氏”になっていない。彼にとつて私は“友人以上恋人未満”なのかな…。この想い、いい加減に気づいて欲しい。もうすぐクリスマスなんだし…。でも、私はそれを相手に告げることはできない。嫌われてしまいそうで、そもそも私は恋愛経験がそんなにない。好きだけど相手に告白する勇気もてない、残念な私…。

【金ヶ崎慶介】「美咲ちゃん、どうしたの。ヘトヘトだけ…。」

【広沢美咲】「ちよつとバタバタしていたからね。」

【金ヶ崎慶介】「あ、そう言えば、今朝、恭祐くんからこんな写真メールが届いたんだけど…。」

写メール…？

【広沢美咲】「…まさか！」

【金ヶ崎慶介】「ほら、コレ。」

その写メールは、今朝、リビングで恭祐が私に見せたあの画像だった。

【広沢美咲】「……………ツ!!!!!!?????」

たちまち恥ずかしくなって私の顔が真っ赤になった。言葉にならなかった。アイツ、ここまでするとは…。と言うか、なぜアイツは金ヶ崎君のメールアドレスを知っているのだろう？

【金ヶ崎慶介】「か、可愛い寝顔だね。何の夢を見ていたの？」

【広沢美咲】「な、なんでもないから！ ぜ、絶対に消してね！」

【金ヶ崎慶介】「お、おう…。（可愛いから保存しておこう）」
アイツ、絶対に許さないから！ …でも、ありがとう。

私たちは来たバスに乗った。バスは多くの客でいっぱい、座席に座ることができず、通路に立つしかなかった。でも、これが毎朝の日常みたいなものだ。

私の横には彼が立っている。何やら、天井付近にある広告を見ているようだ。そこに巨大なクリスマスツリーと周りの木々が綺麗に輝いている。どうやら、イルミネーションの広告のようだ。

【広沢美咲】「…そういえば、もうじきクリスマスだね。」

【金ヶ崎慶介】「えっ？ …あ、うん。美咲ちゃんは、クリスマスとか忙しいの？」

【広沢美咲】「うん…、ここのところ忙しくて、休みの日もバタバタしているし、年明けまで難しいかな…。」

【金ヶ崎慶介】「そっか…。こりゃあ、今年も一人クリスマス確定、かな？」

彼は苦笑いして言った。その表情は、どこか寂しくて悲しそうだった。

ゴメン…、本当は違うんだ。忙しいのは確かなんだけど、実際は何も予定は決まっていない。本当はクリスマスを貴方と2人で過ごしたい。今までお互いクリスマスを一緒に過ごせなかったから…。本音とは違って強がっちゃう私…。素直になれなくてゴメン…。

【金ヶ崎慶介】「いつも忙しくて大変そうだね。」

【広沢美咲】「うん…。」

本当は、貴方に誘ってもらいたい。でも、彼はとても真面目で素直な優しい人。私の言葉をそのまま受け取る人だから、私の本当の気持ちを察してくれるか分からない。私が本音を伝えるのが一番良いんだけど、異性の人、それも一番好きな人を自ら誘ったことがないから自信がない。この気持ち、貴方にわかってほしい…。

【金ヶ崎慶介】「…話は変わるけれど、確か今日からだったよね？」

【広沢美咲】「えっ、何が？」

【金ヶ崎慶介】「教育実習生がやってくる、って言っていなかったっけ？」

【広沢美咲】「教育実習生…。あ…、うん！」

しまった…。言われるまで、すっかり忘れていた！ 今日から1

2月だったつけ。

私の学校では、12月から2学期終業式まで教育実習生が数人やつてくる。私も大学生時代は、自分が通っていた高校に教育実習生として行ったこともある。年に一度なんだけれど、もうその時期がやってきたのか。しかも、今年は特別だ。

【金ヶ崎慶介】「今年は、美咲ちゃんのクラスに教育実習生が一人付くんでしょう？」

【広沢美咲】「正直、不安だな……。まだまだ新米の私に、教育実習生を一人任されるなんて……」

【金ヶ崎慶介】「大丈夫だよ、美咲ちゃんなら。それだけ学校から頼りにされているってことじゃないか。きつと大丈夫だよ。俺からすれば、美咲ちゃんの良い先生だ。自信を持って！」

【広沢美咲】「うん……。ありがとう。」

いつも私を励まして応援してくれる。そんな貴方が、大好き！

バスは駅に到着した。ここで、金ヶ崎君とは別方向になる。なんか寂しいけれど、こればかりは仕方ない。

私は、駅から歩いて目的地を目指した。

私が教師として赴任している学校は、『風凜高校^{ふうりん}』。都内でも有数の有名私立高校で進学校でもある。毎年、有名大学に卒業生を送るほどだ。在校生徒数も多く、部活動も盛ん。そんな学校に私が教師として赴任するなんて、恐れ多い。

駅から少し歩くと、もうそこは通学路だ。風凜高校の生徒が学校を目指して歩いている。男女ともに全体的な黒色と所々に濃い青色が少し混ざったような制服が特徴的だ。女子生徒には首回りに赤ではなく薄い青色のリボンがついて、どこか可愛らしい。

生徒たちは、私を見かけると元気に挨拶してくれる。一部の生徒は私を見るなり、「今日も可愛いね」とか、一部の男子生徒は「俺と付き合って〜」とか言う。お世辞でもありがたい。

しばらくして校門前にやってきた。いつも私は、校門前に来ると必ず立ち止まって、奥に見える校舎を見る。そして、大きく深呼吸

をして、両手で軽く自分の頬をパンパンと二度叩いて気合を注入する。

【広沢美咲】「よし！ 今日も頑張りますか！！」

そう言つて、私は敷地内に足を踏み入れるのだった。でも、まさか、今日から波乱に満ちた学校生活が始まるなんて、この時までの私は思いもしなかった。

【広沢美咲】「おはようございます。」

私は職員室に入るなり、いつも通り挨拶をした。数人の先生が挨拶を返してくれた。しかし、ふと職員室の奥のほうをみると、教頭の机の周りに何やら数人の先生たちが教頭を取り囲むように立っている。

私は不思議に思いながらも、そのまま自分の机に向かい、机の上にカバンを置いた。

【?????】「おはよう、広沢先生。」

声をかけてきたのは、私の隣の席の深沢碧^{ふかさわみどり}先生だ。黒髪パーマで黒い服装なのに、爪だけは赤いマニキュアが塗られている。音楽教師をしている。詳しい年齢は分からないけれど、私より年上でおそらく私の母と同じくらいだろう。私にとっては頼れる先輩だ。

【広沢美咲】「おはようございます。深沢先生、あの…、何かあったんですか？」

【深沢碧】「私も来たばかりだから詳しくは知らないけれど、なんか問題でもあったみたいよ。」

【広沢美咲】「問題？」

【?????】「あゝ、美咲ちゃん、ちょうど良いところに来た！」

私は、後ろから誰かに声を掛けられた。振り向くと、そこに数学と物理担当の落合^{おちあいかずき}一樹先生が、焦ったような表情で私に駆け寄ってきた。背は低いが横は少し太め。黒いコートとスーツ、おまけに黒いカバンを持てば、どこかの会社の部長さんに見える。けれど、実

際の落合先生は白衣を着ている。

【広沢美咲】「ど、どうしたんですか、そんなに慌てて。」

【落合一樹】「良いから、ちょっと来て。教頭が呼んでいる!」

【広沢美咲】「教頭先生が?」

【深沢碧】「アナタ、何かやらかしたの?」

【広沢美咲】「私、何もやっていません!」

【落合一樹】「良いから、早く!」

私は落合先生に腕をつかまれて、教頭先生の前に連れて行かれた。

【落合一樹】「中田教頭、広沢先生を連れてきました!」

【広沢美咲】「お、おはようございます。あ、あの、何か…。」

教頭は、私に背を向けた状態で椅子に座っていた。そして、私が声を掛けると、クルリと椅子を回転させて、私の顔を睨みつけるように見た。その両端に立っていた2人の男性のうち、一人が私に向かって怒った口調で言った。

【?????】「おはようございます、じゃない!! 呑気に挨拶などしている場合か!」

【広沢美咲】「えっ!?!」

私は、いきなり怒られた。

椅子に座っているのは、中田幸一なかつたこういち。この学校の第一教頭だ。この学校には教頭が全部で3人いる。両端に立っているのが、その残りの教頭で、向かって左側が福川染五郎教頭ふくかわそめごろう、右側が若林毅教頭わかばやしつよしだ。中田教頭は、その中でもリーダー的存在で、私にとっては上司になる。教頭の3人はいつも一緒。福川教頭と若林教頭が中田教頭に媚びを売るような形で、いつも傍に控えているからだ。

【福川教頭】「大問題だよ、キミ!」

【若林教頭】「いったい、どういう事なのか説明してくれたまえ

!?!」

【広沢美咲】「説明も何も、何があっただんですか?」

【中田教頭】「広沢先生、今日から何が始まるか、知っているね?」

【広沢美咲】「教育実習期間ですよね。」

【中田教頭】「うむ！」

【福川教頭】「その教育実習生達は、既に会議室に集まっております。」

【広沢美咲】「そのどこが問題に？」

【若林教頭】「全員集まっているわけじゃないんだ。一人だけ遅刻しているんだよ。」

【福川教頭】「しかも、無断で。」

【広沢美咲】「無断で、遅刻…。」

それなのに、なぜ私が怒られるのか分からない。

【福川教頭】「まだ分からないのかね、キミは？」

【中田教頭】「その無断遅刻している実習生、それはキミが担当する実習生なんだよ。」

【広沢美咲】「えっ、そうなんですか！？」

【福川教頭】「“そうなんですか？”じゃないよ、まったく！」

【若林教頭】「教育実習生が初日から無断で遅刻だぞ。分かっているのかね！？」

【広沢美咲】「それだったら、すぐに家にも連絡してみれば良いんじゃないですか？」

【福川教頭】「早くしなさいよ。」

【広沢美咲】「私がやるんですか？」

【若林教頭】「当たり前でしょ！？ 何を言うてるんだ、キミはその実習生は、キミの担当でしょ？ 責任をもってキミがちゃんと確認しなさい！！ そんな仕事、とても忙しい私たちにやらせるつもりですか！？ ねえ、中田教頭？」

【中田教頭】「うむ！」

とても忙しい…って、いつも休憩室で隠れて昼寝したり、接待と称して3人でゴルフ行ったりするのが忙しいのか。

【福川教頭】「とにかく、すぐに保護者に連絡して確認を取りなさいよ…！」

【若林教頭】「まったく初日から無断遅刻するなんて、我が校始まって以来ですぞ。ねえ、中田教頭？」

【中田教頭】「うむ！」

“うむ！”しか言えないのか、このヘツポコ上司は！

私は、その3バカ教頭にストレスを抱えながらも、自分の机に戻った。そして、教育実習生の資料を取り出した。そこには私が担当する実習生の名前や生年月日、住所や経歴などが履歴書のように書かれている。

【広沢美咲】「ええっと…名前は“堂本真衣”どうもとまこと。あ、女の子なんだ。」

男の子がともかく、女の子が無断で遅刻。顔写真を見ると、そんな風には見えない普通の可愛らしい女性だ。でも、遅刻は遅刻。電話して確認してみないと。

私は受話器を持って、履歴書に書かれた電話番号に掛けようとした。と、その時だった。

【教師】「きよ、教頭！ツ！！ 中田教頭！！」

一人の教師が、とてつもなく焦った表情で息を切らしながら職員室に駆け込んできた。私は思わず受話器を置いて、その教師を見た。

【中田教頭】「なによ？」

【広沢美咲】（別の言葉を話したと思ったら）なぜに女口調！？）

【福川教頭】「どうしたね、騒がしい！！」

【教師】「た、大変です！ こ、校門に…！！」

【3バカ教頭】「えっ？」

【広沢美咲】「？」

3バカ教頭や他の教師たちの後を追いかけるように、私も校門に向かった。

生徒用玄関から外に出ると、そこには立ち尽くす教師や生徒たちの姿があつて騒然としていた。

見ると、校門から生徒用玄関に向かって一直線にレッドカーペット

トが敷いてあり、その両端にはレッドカーペットに背を向けるように、黒いスーツに黒サングラスを掛けて片耳にイヤホンをつないだ大勢の体格の良い男たちが、約1メートルおきに整列している。その姿は、まるでどこかの要人を守るSPのようだ。

【3バカ教頭】「なんだ、コイツら〜ッ!!!??」

お〜、ハモった。しかも、面白いほど絵画で有名な“ムンクの叫び”のような表情をしている。

【若林教頭】「…な、中田教頭。何かご存じで？」

【中田教頭】「し、知らん…！ キミたちが知らない事を僕が知るはずないでしょ。」

【福川教頭】「じゃあ、なんなんですか、いったい…。」

【中田教頭】「警察呼んじゃう？」

【若林教頭】「何を言っているんですか!!」

3バカ教頭も、思わぬ事態に焦っている。でも、それはこの場に
いる全員が同じだ。私だって何が起ころのか分からない。

【?????】「おうおう、何だオマエら!!」

すると、騒然とする生徒たちをかき分けながら、こちらも体格の
良い体育教師の荒木先生が名乗りを上げて出てきた。

【福川教頭】「お、荒木先生。彼らに聞いてみて下さいよ!!」

【荒木亮太】「わかりました、福川教頭！ この荒木亮太あらかわりょうた、この
学園に侵入してきた者たちを見事追いつ返してやります!!」

威勢の良い荒木先生の声を受けて、3バカ教頭は歓声と拍手を与
えた。そして、荒木先生は一番近くにいた男に近づいた。

【荒木亮太】「やい、オマエら。来る場所を間違えていないか？
ここはオマエらの来るような場所じゃない！ さっさと立ち去れ

!!」

【男】「……………」

【荒木亮太】「聞いているのか!? このまま黙っているなら、
この俺が成敗してくれる！ 怪我しても知らねえからな!! 覚悟
しやがれ!!」

すると、黙ったままだった男が、ゆつくりと荒木先生に顔を向けた。依然として無表情のままだ。

【荒木亮太】「な、なんだ、やるのか？」

【3バカ教頭】「いいぞ、いいぞ。やっちゃえ!!」

男は、ゆつくりと片手を差し出し、そのまま荒木先生の額ひたいに人差し指の先端をつけた。

【荒木亮太】「？」

次の瞬間、その男はデコピンをしたかと思うと、荒木は大きく弾き飛ばされ、地面に激しく叩きつけられた。

【3バカ教頭】「なっ!？」

【全員】「!!」

【荒木亮太】「……!!」

【広沢美咲】「!!」

【3バカ教頭】「なにいッ!？」

その一瞬の出来事に、私たちは目を疑った。仮にも体育教師で元陸上競技選手でもありボクサー経験もあるあの荒木先生が、いとも簡単に弾き飛ばされたのだ。しかも、一発のデコピンで。

【深沢碧】「彼(荒木先生)……、何しに来たのかしら？」

【中田教頭】「やつは自衛隊と特殊部隊、それから駐在米軍を呼ぼう。」

と、思いついたかのようにポンと手で叩いて言った。

【若林教頭】「だから何を言っているんですか!？ 戦争でも始める気ですか？ まずは救急車でしょ!!」

【福川教頭】「とにかく何者なんですか、彼らは？」

すると、校門のほうに、複数の黒い車が現れたかと思うと、白くて長いリムジンが校門前に止まった。

【3バカ教頭】「なんか止まったッ!!!??」

お、またハモった。しかも、また“ムンクの叫び”だ。

それは別に良いとして、リムジンのほうでは、別のSPらしき男たちがリムジンの周りに集まり周囲を警戒していた。そして安全だ

と判断すると、リムジンの運転席から老紳士のような男性が出てきて、リムジンの後ろのドアを開けた。いよいよ要人の登場か、と思っただけなのにSP達を取り囲んで何も姿が見えない。

【落合一樹】「いったい誰が来たんだ？」

生徒たちも教師たちも、より一層騒然としている。

リムジンのほうにいたSPたちは、その要人を守るように周囲を警戒しながらコチラに少しずつやってくる。その後ろには、大勢のメイドらしき男女の姿などが続いた。

【3バカ教頭】「なんか大勢来た〜ッ！！？？」

面倒なので以下略…。

校門からゆつくりとやってくる集団。その姿は、まるで戦国時代の大名行列のようだ。

少しづつ近づくに連れて、彼らが連れてくる要人の姿も少しずつ分かってきた。

全身を白いスーツとスカートで身にまとい、花がついた大きな白い帽子を被っている。その帽子が邪魔をして顔がよく見えない。けれど、その姿は明らかに目立つ。

御一行様達はレッドカーペットの上を歩き、そしてついに私たちの目の前にやってきて立ち止まった。

すると、3バカ教頭の前に、リムジンの運転席から現れた老紳士がやってきた。

【老紳士】「失礼では御座いますが、貴方がたは私立“風凜高校”の教頭でいらつしやいますか？」

紳士らしい丁寧な口調だ。3バカ教頭は、口をポカンと開けている。

【中田教頭】「…じゃあ、僕はこれにて失礼。キミたち、あとは任せたよ。」

と、その場を立ち去ろうとした。だが、すぐに他の教頭に捕まえられた。

【福川教頭】「…って、逃げないで下さいよ！」

思わぬ人物の登場に、校内全体が騒然となった。

多くの生徒たちがその人物を一目見ようと職員室に押し掛けようとするが、職員室には全く近づけなかった。なぜなら、教師たちが生徒たちを「教室へ戻れ」「教室で自習していなさい」など言いつつ止めるのはもちろんだが、それ以上に、職員室前の廊下で大勢のSPとメイドたちが隙間なくいて前へ進めないのだ。職員室の入口はSP達がしつかり固めている。

最初は、このSPやメイドたち全員が問答無用で職員室に入ってきて、本来の職員の足場さえなくなるほど満員状態になった。それを彼女：堂本真衣さんの指示で老紳士だけを職員室に残し、それ以外の彼ら全員を廊下に追い出して、なんとか職員たちの足場を確保したのである。でも、異様な雰囲気だった。

【保険医のおばちゃん】「どうして、朝からこんなに大怪我するの？ いったい何をやらかしたの？」

【荒木亮太】「別に…。って、知らないのか？ ……痛ッ！ お、おばちゃん、もつと優しく！」

【保険医のおばちゃん】「何を言っているんだい。男だろ？ 本来ならば、救急車で病院に運び込んでいるところさ。それを私直々の秘伝の薬で処置してやっているんだから、少しは我慢しな！」

【荒木亮太】「そ、それ、そんなに効き目が良いの？」

【保険医のおばちゃん】「出来たのは今朝で、使うのは今が初めてだ（笑）」

【荒木亮太】「誰か救急車〜ッ！！」

【保険医のおばちゃん】「何を泣いているんだい、大の男がみつともない！！」

【荒木亮太】「…これ、労災おりる？」

【保険医のおばちゃん】「知らんよ、そんなこと。」

【荒木亮太】「そんなあ〜…。」

とりあえず、ご愁傷様とでも言っておこう…。それよりも一保険医が勝手に薬を作っても良いのだろうか、という疑問はひとまず置

いておこう。

【落合一樹】「ちょ、ちょっと通して！俺は教師だから！！
通せっつゝのー！！」

どうやら落合先生は白衣を着ているのにも関わらず、生徒または不審者と間違えられ、仁王立ちしたSP達（しかも黒人）が中に入れてくれないらしい。

【落合一樹】「ちょっと見てないで助けてよ、美咲ちゃん！！
おーいッ！！」

とりあえず、あれ（落合先生）も放っておこう…。私は、今それどころではないのだ。

職員室の片隅に小さな応接室がある。そこに堂本さんと老紳士は案内され、堂本さんはソファに座っている。その横には老紳士が控えており、テーブルを挟んだ向かい側に3バカ教頭がいた。そして先ほどから、3バカ教頭と堂本さんは、お互いニコニコ顔で見合ったままだ。その様子を、少し離れたところで私を含めた教師全員（一部それどころではない教師2名（＝落合、荒木）を除く）が見守っていた。

【若林教頭】「中田教頭、何か言ってお下さいよ！」

【中田教頭】「そ、そうだな。…と、とりあえず、お茶とお菓子をどうぞ。」

と、温かいお茶を堂本さんに差し出した。

【福川教頭】「…って、お茶とお菓子を与えてどうするんですか！？」

【若林教頭】「仮にも彼女は初日から無断で遅刻したんですよ。ビシッと言ってやって下さいー！」

【堂本真衣】「美味しい…。最近のインスタントのお茶もやるよっね。」

【福川教頭】「…って、キミも普通に飲むなー！！」

【若林教頭】「しかも、感想がなんかムカつくー！！」

【中田教頭】「インスタントだったの？ダメじゃないか、今度

はちゃんとした物を買わなきゃ…。」

【福川教頭】「中田教頭、もう黙ってて！」

【中田教頭】「はい…。」

【若林教頭】「先、ちつとも進まない…。(泣)」

この3バカ教頭、たぶん漫才コンクールに出場したら間違いなく入賞できると思う、と感じたのは私だけだろうか…。

【福川教頭】「良いですか、貴方は教育実習生なんですよ。それを事もあろうに初日から無断で遅刻するとは、どういう事なんですか！」

【中田教頭】「良いぞ、もつと言っちゃえ！」

福川教頭はキツと中田教頭を睨みつけた。それを見た中田教頭はシユンと大人しくなった。

【堂本真衣】「…なさい。」

【3バカ教頭】「えっ？」

【堂本真衣】「…グスツ。…わ、わたくし、…今日から教育実習生かと思うと、嬉しくて嬉しくて、…夜も寝れなかったんです。それに…、この実習、初めてだから、何を着ていけば良いのか、分かんなかったんです。それで、皆さんにもご迷惑をお掛けして、…ホント、ごめんなさい！ わたくしのバカ、バカ、バカ！ …グスツ(泣)」

しばらく3バカ教頭は怒った顔で、堂本さんの泣き顔をジッと見ていた。

【3バカ教頭&男性教師一同】「か、可愛い…。」

【深沢碧】「ケツ！（怒）」

だめだ、こりゃ…。

【堂本真衣】「改めまして、わたくし、堂本真衣と申します。こちらは執事の倉澤です。」

【執事の倉澤】「はじめまして。堂本財閥の執事をしております、倉澤と申します。以後、お見知りおきを…。」

【全員】「ど、堂本財閥…ッ!？」

堂本財閥と言え、日本で知らない人はいないと言われるほど、日本で一番の大企業グループの総本山だ。洋服、運輸、出版、映像、食品などあらゆる産業でトップの実績をあげ、その名は世界にも響いている。確か、一人娘がいたと噂に聞いていたけれど、その人が貴女だったとは…。

それを聞いた中田教頭は、ポカツと福川教頭の頭を叩いた。

【中田教頭】「申し訳ありません！ まさか堂本財閥の一人令嬢だったとは…。どうか、我々のご無礼を平に、平にい。ほら、キミたちも謝って！」

【福川教頭 & 若林教頭】「申し訳ありませんでしたッ！！」

【中田教頭】「これからも、どうぞ遠慮なく遅刻して下さって結構です。」

…って、いくらなんでも、それはダメでしょ。

【若林教頭】「ということは、廊下にいらつていらっしゃるあの方達は…。」

【執事の倉澤】「堂本財閥が誇る、真衣お嬢様専属のSPとメイド達で御座います。」

【堂本真衣】「皆さんの迷惑になるだろうから、わたくしが来なくても良いと命じたのですが、お父様やお母様が…。」

【執事の倉澤】「なにせお嬢様は、堂本財閥のご令嬢で御座います。ゆくゆくは堂本財閥の跡取りとなられる御方。万が一の事があつてはならぬ、とのご意向で御座いました。」

【福川教頭】「跡取り…って、お嬢さんは教育実習生として我が校にやってきて下さっているじゃないですか。」

【執事の倉澤】「そうなんで御座いますが…。」

と、ちよつと困った表情で堂本さんをチラッと見た。

【堂本真衣】「倉澤、それを話す必要はないわ。わたくしは今日から“教育実習生”として来ているのよ。」

【執事の倉澤】「…はい、お嬢様。」

一瞬、ちよつと空気が変わったような気がした。

【深沢碧】「なんか…あの嬢さん、ちょっとワケありっぽいわね。面倒なことにならなければ良いけれど…。」

【落合一樹】「かの有名な堂本財閥にも問題を抱えているみたいだね。」

【広沢美咲】「…って、落合先生、いつの間に私の横に!?!」

強引にSP達の門を通ってきたのか、落合先生の白衣はシワクチャになっていた。

【福川教頭】「広沢先生、ちょっと…。」

【深沢碧】「お呼びみたいね。」

【広沢美咲】「はい!」

私は返事をしたあと、3バカ教頭たちのところへ向かった。

【中田教頭】「え、こちらが2-Bのクラスの担任の広沢先生です。まだ若いため、何か不都合なことがあるかもしれません。その時は、私たちに遠慮なく申し出て下さい。処分をすぐに検討しますので…。」

“処分”って、もう何か問題が起きること前提ですか…。

【堂本真衣】「はじめまして、広沢先生! 短い間ですが、よろしくお願ひします!」

【広沢美咲】「え、ええ…。こちらこそよろしくね。」

どこかのボンボンのお嬢様らしからぬ可愛らしい笑顔をみせてくれる。ちよつと意外だったことに私は少しビックリした。

【若林教頭】「広沢先生。」

【広沢美咲】「はい?」

と、私は腕を捕まえられ、耳元で小さく囁かれた。

【若林教頭】「良いですか、相手は世界有数の大企業のご令嬢です。くれぐれも粗相そそうのないようお願いしますよ?」

【広沢美咲】「大丈夫ですよ。そんな不安にならないで下さいよ。」

【若林教頭】「何をそんな気楽な事を言っているんですか!?! 貴女のクラスには例の“問題児”がいることをお忘れですか?」

“問題児”…。確かに、私のクラスにはその生徒が1人だけいる。
【若林教頭】「万が一、堂本さんの身に何かあつたら、貴女の責任ですからね！ 場合によっては、自宅じたくきんしん謹慎どころでは済みませんよ。“問題児”には、常に気にかけておくように！！ 良いですね？」

【広沢美咲】「わ、分かりましたよ…。」

【堂本真衣】「何か？」

【若林教頭】「あ、いえ、何でも…。今後の“相談”です。」

と、私の肩をポンポンと叩きながら、顔だけ堂本さんに向けて笑顔で答えた。

【広沢美咲】「ハハハ…（苦笑）」

なんか朝からもう色々な意味で疲れたわ…。

【堂本真衣】「へえ、広沢先生って、まだ26歳なんですね。」

【広沢美咲】「“まだ”って…。」

職員室での朝礼（？）が終わったあと、私は堂本さんを連れて教室に向かっていた。その道中で、堂本さんは私に色々と質問してきたのだ。

【堂本真衣】「あ、失礼な意味で言ったのではないですよ。まだまだお若いんですね、と言ったんです。」

【広沢美咲】「…喜んで良いのかな？」

【堂本真衣】「もちろん！」

堂本さんは、また可愛らしい元気な笑顔を見せてくれる。とても素直な子なのだろう。でも、私は別の意味で気になることがある。それを、堂本さんにぶつけてみることにした。

【広沢美咲】「それにしても…。」

【堂本真衣】「…あ、気になりますか？」

私が気になっていること。それは、私と堂本さんの間に、2人のSPがピツタリくっついている事だ。そして、私たちの後ろには、

執事の倉澤という老紳士と、その他（残りのSP達と大勢のメイド達全員）がゾロゾロと後をついてきているのだ。

【堂本真衣】「なんか話しづらいですよね？」

【広沢美咲】「ええ、まあ…。もしかして、職員室の時と同様、この御一行様全員を教室に入れる気では…。」

【堂本真衣】「そんな事は致しませんよ。生徒さん達がビックリしちゃいますもの！」

もう既に今朝の登場の時からビックリしていると思うけど…。

【広沢美咲】「この方達、本当に堂本さんの専属なの？」

【堂本真衣】「ええ。でも、これでも、ほんの一部ですよ。」

こ、これが、ほんの一部なの！？

【堂本真衣】「執事なんて、倉澤を含めてあと10人います。」

【広沢美咲】「じゅ、10人！？」

【堂本真衣】「倉澤は、その10人の中でも一番の執事なんですよ。」

【執事の倉澤】「そ、そんな滅相な事で御座います。わたくしなぞ、まだまだです。」

【広沢美咲】「倉澤さん、でしたっけ…？」

【執事の倉澤】「お気軽に“倉澤”と呼んで下さって結構で御座います。」

いえ、そんな私こそ恐れ多いです…。

【広沢美咲】「執事のお仕事は長いんですか？」

【執事の倉澤】「ええ、それはもう…。なにせ先代の頃より仕えておりましたから…。お嬢様がお産まれになられてからも、常に傍に控えておりました。」

【堂本真衣】「わたくしがお風呂に入るときやトイレに行くときなども、傍に控えていたんですよ。」

【広沢美咲】「へ、へえ…。」

【堂本真衣】「さすがに、その時は中に入れず、外で待つてもらっていたわ。わたくしだって大の女の子だし、恥ずかしいもの。」

【執事の倉澤】「お恥ずかしゅう御座います…。」

【広沢美咲】「へえ…。」

聞く度に、もう私は目が点の状態になっていた。

【堂本真衣】「そうだわ！ 今回の親交を機に、我が家へ遊びに来て下さってはどうかしら？」

【広沢美咲】「え？」

【執事の倉澤】「それは良ろしゅう御座いますね。きっと、ご両親もお喜びになるかと思えます。」

【堂本真衣】「広沢先生、どうですか？」

【広沢美咲】「じゃ、じゃあ機会があつたら…。」

【堂本真衣】「嬉しいッ！ 良かった！！ 約束ですよ。約束は絶対ですからね！」

堂本さんの家に行ったら、きっと目が点だけでは済まないかもしれない…。

でも、今日知り合つたばかりで、しかも教師と教育実習生という関係なのに、自分の家に招くだけでそんなに喜ぶとは…。

ちょっと不思議に思いながらも、私たちは2 - Bの教室前にやってきた。

さすがにSPやメイドさん達を教室の中に入れるワケにもいかず、廊下にも置いておくワケにもいかず、倉澤さんの指示で今回は倉澤さんとごく少数だけを残し、残りは屋敷に帰ってもらうことにした。教室からは賑やかな声が聞こえる。さすがに色々と噂になっている事だろう。通いなれている教室なのに、なんだか入るのが億劫に感じる…。

すると、私たちが来たことに気づいたのか、急に教室内が静かになった。

【堂本真衣】「どうしたんですか、広沢先生。入らないんですか？」

【広沢美咲】「えっ？ あ、いや、入るわよ。もちろん！」

私は堂本さんに背を向けて軽い深呼吸をしたあと、覚悟を決めて、

教室の扉を開けて中に入った。最後に入室した倉澤さんが扉を閉め、何事もなかったかのように、そのまま教室の後ろに移動した。しかし、当然の如く、29人の生徒たちの視線が彼を追いかける。これは充分予想できたことだ。

【広沢美咲】「みんな、おはよう。」

私の言葉で、後ろを向いていた生徒たちの視線が一斉に私に向いた。最初は私を向いていた視線だが、少しずつ私の隣に移動していくのが分かった。これも当然と言えば、当然だ。なんたって、堂本さんの服装は目立つ。単に白いだけかと思ったら、太陽の光が当たるときにキラキラと服全体が輝くのだ。あと、白い花がついた大きな帽子もオマケについて、かなり目立つし、間違いないアウエー感もある。でも、堂本さん本人は全く気にせず、笑顔だ。

【広沢美咲】「ゴ、ゴホン…。え、皆も既に知っているかと思うけれど、今日から2学期終業式まで教育実習期間が始まりました。この2・Bでも、教育実習生として堂本さんが教師の勉強をする為にやって来ました。堂本さん、皆に自己紹介して下さい。」

生徒たちの視線を浴びる中、堂本さんが教壇に立った。

【堂本真衣】「はじめまして、庶民しよみんの皆さん。」

私は思わずガクツと倒れそうになった。同時に、一気に教室がザワついた。当たり前だ。

【広沢美咲】「堂本さん！」

【堂本真衣】「あ、失礼しました…。はじめまして、愚民ぐみんどもの皆さん。」

さらにザワついた。もしかして、ワザと？

【広沢美咲】「堂本さん、口調に気を付けて!!！」

【堂本真衣】「ごめんなさい、慣れていないもので…。」

堂本さんは、教師になる以前に、もっと色々勉強する必要がありそうな気がする。

【堂本真衣】「ご無礼を致しました。お詫びに…倉澤!」

【執事の倉澤】「はい、お嬢様…。」

すると、倉澤さんは教室から廊下に出たかと思うと、台車に何かを色々と載せてやってきた。そして、順番に生徒たちの机を周り、その何かを一つずつ置いていった。それは、小さい紙袋で、どうやら中に何か小物でも入っているみたいだ。

【広沢美咲】「それ、いったい何なの？」

【堂本真衣】「ほんの挨拶代りのプレゼントです。」

それを置かれていった生徒たちが次々とザワメキだした。たぶん、中身が気になるのだろう。

【執事の倉澤】「お嬢様、1名の欠席者を除いて、クラスの生徒皆さんに配り終えました。」

【堂本真衣】「ありがとうございます、倉澤。下がって。」

倉澤さんはその場で一礼をして教室の後ろに戻った。私も、貰っていないんですけど…。

【堂本真衣】「皆さん、それはわたくしからのプレゼントです。どうぞ中を開けて下さい。」

生徒たちは次々と袋の中にあつたものを取り出していった。そして、それを見せた。

【堂本真衣】「それは、非売品の特製キーホルダーです。わたくしたち堂本財閥が、皆さんだけに作り上げたものです。」

そのキーホルダーの先端には、キラキラと眩しいくらいに光るゴツゴツした丸い小さな玉がついていた。

【堂本真衣】「ちなみに、その先についているのは、ダイヤモンドです。」

【全員】「ダイヤモンド？！」
この瞬間、一番のザワメキが起こった。ビックリする生徒がいれば、大喜びする生徒もいる。だが、これは…。

【広沢美咲】「堂本さん！」

【堂本真衣】「あ、値段ですか？ほんの安物ですよ。1つ50万ほどですから。費用は全部、わたくしの毎月のお小遣いで支払っていますし。」

【全員】「じゅまん…ッ!？」

もつと教室中がうるさくなった。

色々とツツコむべき所があるが、それよりも私が気にしているのは…。

【広沢美咲】「堂本さん、値段の話じゃなくてね…。」

【堂本真衣】「あ、広沢先生や他の職員の皆さんには別の物を用意していますから、ご心配なく。」

その心配じゃないのよあッ!! (泣)

結局、1時間目はほとんど授業にならなかった。

【広沢美咲】「あゝ、今日はドバッと疲れたあゝ!」

その日の夜、私は家の近所にある居酒屋にいた。この居酒屋“ふくていま”は、私の知人が経営しており、ほぼ毎週のように通っている。実は、昨夜もこの居酒屋で大学時代の友人と飲んでいたので今日は、横顔をカウンターに押し付け、1人グタッと倒れていた。

【?????】「どうスィたの、スオんな疲れた顔をスィて…。」

【広沢美咲】「んゝ、ちよつとね…。学校で色々とおつてさ…。」
ちよつと発音がおかしいこのオジサンは、この居酒屋の店主である福嶋忠雄さんだ。私のお父さんと知り合いで、私とも幼い頃からふくしまただおの仲もある。発音がおかしいのは昔からの持病で、サ行の発音が上手くできないのだという。だから、この人の会話を聞いていると、なんか面白くてツボにはまる。

【福嶋さん】「何か飲む?」

【広沢美咲】「んゝ、あまり飲む気力ないけれど、とりあえず生ビール!」

【福嶋さん】「あいよ。」

私の前にビンに入ったビールと、空のコップ、そして御つまみが置かれた。私は、コップにビールを注ぎ、そしてヤケで勢いよく一気飲みした。

【広沢美咲】「ぷはあ〜ッ！ やっぱ疲れたあとのビールは格別だわ！！」

【金ヶ崎慶介】「良い飲みっぷりだね。」

【広沢美咲】「そう？ …… って、金ヶ崎君！？」

いつの間にか、私の左隣に金ヶ崎君が座っていた。ビックリして、私は飲んだビールがあわや噴出しそうだった。

【広沢美咲】「い、いつからココに！？」

【金ヶ崎慶介】「たった今だよ。あ、オジサン、俺もビール下さい！！」

【福嶋さん】「あいよ。」

もう最悪！ 恥ずかしい所を一番見られたくない人に見られちゃったよあ〜ッ！！（泣）こんな恰好、金ヶ崎君に嫌われちゃったかなあ？ なんて急に来るのよ〜！！

【金ヶ崎慶介】「それより、こんな所で一人で飲んでいて、何かあったの？」

【広沢美咲】「あ、もう聞いてくれる？」

私は、今日あった出来事のすべてを金ヶ崎君に話した。それを金ヶ崎君は、所々で相づちしながら最後まで聞いてくれた。

【金ヶ崎慶介】「…へえ〜、そんな事があつたんだ。」

【広沢美咲】「そうなのよ。堂本さんったら、クラスの生徒に小さなダイヤモンド1個まるごとプレゼントしちゃって。それを聞きつけた他のクラスの生徒たちが休み時間に駆けつけちゃって、堂本さんも予備に大量に用意していたとかで、ほぼ同じものを皆に豆まきのようにバラまいてさ。それに、職員の皆にも配って、生徒も職員も大騒ぎ！ まったく授業にならなかつたわよ。皆は大喜びだけれど、私は何だか買収されたような気がしてならないわ。」

【金ヶ崎慶介】「でも、美咲ちゃんのカバンについているそれは何？」

【広沢美咲】「う…。」

私のカバンには、ちゃっかり小さなダイヤモンドが2個ついたキ

「ホルダーをつけていた。」

【広沢美咲】「私が心配しているのは、これを渡されたことによつて、万が一、彼女が何か悪い事をした時にはコレをあげただから目をつぶっている、つていう暗黙の了解な気がするのよ。実際、3バカ教頭なんか、無断遅刻を黙認しちゃったし。あくまで私の予感だけれど、このままでは絶対終わらない気がする…。」

【金ヶ崎慶介】「考えすぎじゃないの？」

【広沢美咲】「だと良いんだけどね…。」

私は、ビールを軽く口にした。それを横で、金ヶ崎君が見ていた。【金ヶ崎慶介】「…とここで、美咲ちゃんのところに来た教育実習生の人つてさ、全体的に白い服装で、キラキラと輝いていて、白い花のついた大きな帽子を被っている？」

【広沢美咲】「えっ、そうだけれど、どうして詳しく知っているの？」

【金ヶ崎慶介】「だって、今、キミの隣にいるんだもの。」

【広沢美咲】「いッ!!!!????」

【堂本真衣】「マスター、わたくし、カシスオレンジ。」

【執事の倉澤】「わたくしは、ジュースで。リムジンの運転がありますので…。」

【福嶋さん】「あいよ。」

見ると、私の右隣に、これまた、いつの間にか堂本さん、その隣には執事の倉澤さんもいた。

【堂本真衣】「あら、広沢先生。お疲れ様ですう。」

【広沢美咲】「“お疲れ様ですう”じゃなくて、なぜここに!？」

【堂本真衣】「堂本財閥の手にかければ、こんなこと簡単ですよ。」

「恐るべし、堂本財閥…。」

【金ヶ崎慶介】「美咲ちゃん？」

【広沢美咲】「あ…。」

【堂本真衣】「あ、申し遅れました。」

突然、堂本さんが私の前にキラキラ顔で立った。

【堂本真衣】「わたくし、今日から広沢先生のもとで教育実習をすることになりました、堂本真衣です。これ、お近づきの印にどうぞ…。」

と、堂本さんは、小さなダイヤモンドが3つもついたキーホルダーを取り出し、金ヶ崎君にプレゼントしようとした。

【金ヶ崎慶介】「あ、どうも…。」

【広沢美咲】「貰っちゃダメ！」

私は、そのプレゼントを強引に奪い取ろうとした。しかし、それを奪い取ったのは良いけれど、自分の椅子につまづき、盛大に転んだ。

【金ヶ崎慶介】「美咲ちゃん!？」

【福嶋さん】「だ、だいずヨうぶか!？」

【堂本真衣】「大丈夫ですか、広沢先生!？」

【広沢美咲】「最悪だあ…。」
心配そうな表情で手を差し出してくれた金ヶ崎君につかみ、半泣きしながらも私は自分の席に戻った。

【堂本真衣】「広沢先生って、見た目と違って、案外ドジなんですよね！」

アタのせいだよ、アタの…!! (怒)

私は、ビールを口にしながら、そう心の中で思った。

【堂本真衣】「ところで広沢先生、この人って先生の彼氏さんですか？」

【広沢美咲】「ブツ！」

思わぬ言葉に私はビールをブツと吐き出してしまった。しかも、それを思わず横にいた金ヶ崎君の顔に向けて…。

【広沢美咲 & 堂本真衣】「あ…。」

【金ヶ崎慶介】「…。」

金ヶ崎君の顔から床に向かってビールが流れ落ちた。

【広沢美咲】「ご、ごめんなさい!!! 大丈夫?」

私はすぐに自分のオシボリで金ヶ崎君の顔を急いで拭いた。

【金ヶ崎慶介】「だ、大丈夫だよ。心配しないで…。」

と、ちよっぴり笑顔で答えてくれた。そして、金ヶ崎君も自分のオシボリで顔を拭き、執事の倉澤さんが「大丈夫で御座いますか？」と聞きながら洋服を拭くのを手伝った。それを見て、私はキツとした顔で元凶を睨んで言った。

【広沢美咲】「アンタ、突然、何を言い出すのよ!？」

【堂本真衣】「まさか、あんなにビールを吹き出すなんて…、適当に言ったのに凶星だったんですね。」

凶星と聞いて、私はドキツとして顔を赤らめた。そして、すぐに【堂本真衣】「ち、違うから。ただの大学生時代からの友人よ!」と、思わず否定してしまった。本心では彼の事が大好きだけれど、まだ恋人に昇格していないから、あながち間違えではない。でも、自ら友人と発言したことに對し、自分自身を傷つけてしまった。つまり、自爆だ。

【堂本真衣】「ふ〜ん…。」

何よ、そのニヤニヤ顔の“ふ〜ん”って…。

【堂本真衣】「じゃあ、もし彼女がいなかったら、私が立候補しちゃうかな〜。彼、とても真面目で優しそうだし…。」

ホント、突然、何を言い出すのだ、この子は!

【広沢美咲】「だ、ダメだからね、それは!!!」

【堂本真衣】「何ですか? 広沢先生は、彼とお付き合いもしていない“ただの友人”なんですよね? 私が立候補しても文句言えないですよ。」

【広沢美咲】「そ、それは…。」

【堂本真衣】「それは?」

この子は、ジツと私の目を見てくる。それを見て、とうとう私は観念した。

【広沢美咲】「そうよ。…す、好きよ!」(小声) これで文句ない!?(普通の声)「

完敗だった…。この子は、いつたい何なんだ。

【堂本真衣】「やっと白状しましたか。」

【広沢美咲】「良い!? くれぐれも彼には内緒だからね!」

【堂本真衣】「どうしてですか? 好きだったら、想いを伝えてお付き合えば良いじゃないですか。」

【広沢美咲】「う…。」

【堂本真衣】「自分の想いを伝えないと、ホントに誰かさんに先を越されてしまいますよ?」

彼女の言っていることは正論だ。私もできることなら、今すぐにも伝えたい。でも…。私はチラッと金ヶ崎君を見た。金ヶ崎君は執事の倉澤さんと意気投合したのか、何か話している。

【堂本真衣】「奥手なんですね、広沢先生って。」

【広沢美咲】「え?」

【堂本真衣】「そんなんだから、いつまでたっても恋人に昇格できないんですよ。」

時々、核心を突いてくる子だ、この子は…。まったく読めない。

【広沢美咲】「じゃ、じゃあ、告白しろって言うの? それはアイドル高いわよ。第一、うまくいくとは限らないし…。」

【堂本真衣】「ハードルって…。先生は、恋人になりたくないんですか? 本当に今のままでも良いんですか?」

【広沢美咲】「わ、私は…。」

【堂本真衣】「私は?」

また、ズイツと私の目を見てくる。咄嗟に私は目をそらした。

【広沢美咲】「もっと彼と触れ合いたい…。」

【堂本真衣】「でしょ?」

私は、好きな人と気持ちを通わせたい。手を握ってデートしたり、2人だけの時間をもっと沢山過ごしたい。でも私が告白することで、もしかしたら相手に嫌われちゃうかもしれないし、今の関係自体、下手をすると失ってしまう可能性もある。それが一番怖いのだ。

【広沢美咲】「…でも、告白は…やっぱり難しいな。相手が自分

をどう想っているのかも分からないし…。」

それを聞くと、彼女はハア〜とため息をついた。

【堂本真衣】「そんな適当な理由を作って予防線を張っていて、先生はよっぽど自分が大事なんですね。」

【広沢美咲】「！」

“自分が大事”と聞いて、私は一瞬ムカツとした。すぐ反論しようとしたが、まだ彼女の言葉は終わっていないかった。

【堂本真衣】「あの人とは知り合って長いんですね？ それだったら、これは引かれるとか、そうではないとか分かりますよね。嫌われることを怖がって遠回しな事をしていても、その想いは相手にはキチンと伝わりません。例えば相手とどんなに信頼関係が深くても、積極的に本人に歩み寄らないことには何も始まりませんし、進みもしませんよ！」

【広沢美咲】「……。」

彼女の言葉を聞いて、私の一瞬の怒りはどこかへ消え去っていた。そして、何か心を打たれたような気がした。

【堂本真衣】「とにかく、本当に相手の事が好きなら、今を大切にしたら自ら想いを伝えるべきです。そうする事で、もっと相手と近づけますから。それが難しいなら、まずは“私は貴方の事を大事に思っていますよ”って感じなことを相手に伝えていけば良いですよ。そういう想いを無碍むげにするような人ではなさそうですから。」

【広沢美咲】「…うん、そうだね。」

【堂本真衣】「目標！ クリスマスまでに想いを伝えること！！」

【広沢美咲】「えっ！？ く、クリスマスって、もう残り1か月もないじゃない！！」

【堂本真衣】「それくらいの意気込みでやらないとダメですよ。あの人に彼女ができるまでの時間は無限ではないんですからね！でも、決して焦らないことです。」

【広沢美咲】「そ、そんな…。」

クリスマスまでに想いを伝える、でも焦るな…それって、けっ

こう難しい。ちょっと勇氣は出たけれど…。

それにしても、年下で、しかも先輩と後輩、教師と教育実習生という関係なのに、さらに世界有数の財閥のお嬢様に恋愛について教えられるとは、なんか情けない…。

【金ヶ崎慶介】「なに、何の話？」

【広沢美咲】「いつ!？」

突然、話に加わってきてビックリした。

【金ヶ崎慶介】「なんか非常に真剣に話をしていたけれど…。」

【広沢美咲】「今後の実習について打ち合わせしていたんだよ！」

(汗)

【金ヶ崎慶介】「そうなんだ。仕事が終わって、こんな場所でも、真剣に仕事の事を考えているなんて、美咲ちゃんって本当に偉いね。」

【広沢美咲】「ありがとう。」

【福島さん】「こんな場所で悪かったな…。」

【金ヶ崎慶介】「いつ!？」

ふう〜、危ない危ない。何とか難を逃れた〜。本当は貴方の事について、真剣に話していたなんて言えないものね。

【堂本真衣】「違いますよ。広沢先生が好きな“彼”について話していたんですよね？」

【広沢美咲】「いつ!？」

【金ヶ崎慶介】「好きな彼…?」

せっかく上手く誤魔化せたと思ったのに〜ッ!! どういうつもりだ、この子は〜!!

【堂本真衣】「……………」

【金ヶ崎慶介】「……………」

ああ…、金ヶ崎君が何か元気がない。嫌われちゃったかな…。当然だよ、ウソをついていたんだから…。

【金ヶ崎慶介】「美咲ちゃん…、彼氏がいたんだ…。」
「やっぱり元気がない!!! どうしよう、何か言い訳をしないと！」

【堂本真衣】「そうですよ。貴方には広沢先生より、もっと良い人がいますよ。」

火に油を注いでどうするのよ〜!!! (大泣)

【金ヶ崎慶介】「…そっか。そう、だよね…。」

さらに元気をなくしている!

【金ヶ崎慶介】「…俺、今日はもう帰るね。」

【執事の倉澤】「もうお帰りですか?」

【堂本真衣】「え〜!? もっと一緒に飲みましょうよ!」

【金ヶ崎慶介】「…ごめん。また今度ね。」

そういつて金ヶ崎君は代金をカウンターの上に置いて、椅子から立ち上がった。

【広沢美咲】「待つて!」

【金ヶ崎慶介】「!」

【堂本真衣&執事の倉澤】「!」

私は、咄嗟に金ヶ崎君を呼び止めてしまった。彼は魂が抜けたような表情で私を見ている。きっと、私が嘘をついていたことにショックを受けているに違いない。とにかく、謝らなければ!

【広沢美咲】「(嘘をついて)ゴメンね…。」

【金ヶ崎慶介】「良いよ、もう…。お幸せにね。」

そういつて、金ヶ崎君は静かに店を出て行った。私は、黙ってそれを見送ってしまった。

でも、金ヶ崎君が最後に残した“お幸せにね”って言う一言がなんか引つかかる。

それよりも、金ヶ崎君が帰ってしまった。もう良いと言っていたけれど、きつと怒っているに違いない。長い付き合いだけれど、あんな表情、今まで見たことがない。

【堂本真衣】「やつちゃいましたね…。」

その瞬間、私は堪忍袋の緒が切れて、怒りに満ちた顔で堂本さんを見た。

【広沢美咲】「どういっつもりよ! せっかく誤魔化したのに、」

怒って帰っちゃったじゃないのよ!!」

【堂本真衣】「…わたくしは、カマを賭けてみただけですよ。」

【広沢美咲】「何ですって?」

【執事の倉澤】「お嬢様をそんなに責めないで下さい。何も悪気があって言ったワケではないんです。お嬢様は、あの方が貴女にどういうお気持ちを持っていらっしゃるのか知りたくて、ワザとおっしゃったんです。」

【広沢美咲】「…どうということ?」

【堂本真衣】「相手と恋人同士になるには告白が大事だけれど、恋人というのは2人の気持ちと同じでなければ、例えば告白したとしても基本的に断られるだけなの。2人は長い付き合いだからお互いの事はある程度知っている。いつ恋人になってもおかしくないのに、それがなっていない。という事は、相手の気持ちにも問題があると感じたんです…。」

【執事の倉澤】「そこで、お嬢様はワザと貴女に好きな彼がいるとウソの事を言い、相手の反応を見たかったんで御座います。」

【堂本真衣】「安心して下さい、先生。見た感じ、彼も先生の事を好意に思っているみたいですから。」

【広沢美咲】「え…?」

【堂本真衣】「相手が自分に好意を持っていなければ、普通に明るく振る舞うはずですよ。でも、彼の場合、その逆。かなり元気をなかつた。ということは、相手は先生に対して、かなり好意に思っているとみて間違いないでしょう。それに、ウソの事実を知った彼は逃げるようにして立ち去りました。きっと先生に恋人がいたという事実が受け入れられないんですよ。」

【広沢美咲】「そ、そうなんだ…。」

金ヶ崎君が、私にかなり好意を抱いていた。それを知り、私は何だか今にも飛び上がりそうなくらい元氣と勇氣がわいてきた。

【堂本真衣】「でも、残念なことに、大きなミスを先生は犯しています。」

【広沢美咲】「ミス？」

【堂本真衣】「先生、彼が帰ろうとした時、彼を呼び止めて彼に謝りましたよね。」

【広沢美咲】「え、ええ…。私がウソをついていたから…。」

【堂本真衣】「やっぱり。」

【執事の倉澤】「まずいですね、これは…。」

【広沢美咲】「え、何なの!？」

【執事の倉澤】「謝るのは良かったのですが、一言足りなかったんで御座います。おそらく彼は、貴女の謝った気持ちを、違う意味で受け取ったのだと思います。」

【広沢美咲】「違う意味？」

【堂本真衣】「彼は、とても素直で優しく真面目な人。先生に（ウソの）好きな彼がいると知ったとき、おそらく気が動転したんでしょう。思わぬ事実には思考が正常に働かなくて、その事実を受け止めたくなって、内心では半ば裏切られたような気持ちでしょう。で、その直後、先生が彼に“ゴメン”とだけ伝えて謝った。素直な彼は、きつと“私に彼氏がいてゴメン”という意味で単純に受け取ってしまったんですよ。」

【広沢美咲】「!！」

【堂本真衣】「先生があの時、“ゴメン”と一言だけ謝るのではなく、きちんともう一言付け足して、本当の事を最後まで説明するべきだったんですよ。」

【執事の倉澤】「言葉とは、とても難しいものです。例え長い付き合いで絆が深いとしても、気持ちが入り上手く伝わらない事もあるの御座います。良かれと思った貴女の謝った発言は、相手の気持ちを更に深く傷つけることになってしまったのです。」

【広沢美咲】「そんな…。」

どうしよう…。私自身が彼を余計に陥れていたなんて…。ただ、私は金ヶ崎君に謝りたい一心だったのに…。

【広沢美咲】「…そうだ。ちゃんと謝らなければ!」

【執事の倉澤】「今なら、まだ間に合うかもしれません。」

【堂本真衣】「先生、追いかけて！」

私は、すぐに店を出て、走って追いかけた。もう無我夢中で、どこをどう走っているのか分からない。

どうしよう…。謝らなければ…。金ヶ崎君にキチンと謝らなければ！ 私がしたことを謝らなければ！！ ゴメンなさい、金ヶ崎君。

私の気持ちが足りなかったばかりに…。ごめん…。ごめんなさい…。本当に、ごめんなさい！！

私は大泣き状態だった。それでも私は必至になって走った。化粧が崩れても良い。今は、金ヶ崎君に謝るのが先だ。

私は走った。ヒールが壊れても良い。裸足になって走っても良い。転んで怪我をしたって良い。最悪、車に轢かれても良い。とにかく謝りたいという一心だった。

だが、どのくらい走っても、一向に金ヶ崎君の姿は見当たらない。どこへ行ったのだろうか。

【広沢美咲】「そうだ、携帯！」

金ヶ崎君の携帯に電話をすれば、居場所がわかるかもしれない。電話で謝る方法もあったけれど、それではダメだ。ちゃんと面を向かって謝らないと！ 私の本当の気持ちを分かってもらわないと！！ 私は、すぐに金ヶ崎君に電話を掛けた。

【アナウンス】『お客様がお掛けになった電話番号は、電源が入っていないか、電波の届かない場所にいるため掛かりません…。』

【広沢美咲】「そんな…！」

私は、再び掛け直した。だが、何度やっても同じだった。

電話に出たくないほど、大きなショックを受けていたなんて…。私は、なんて酷い女なんだろう。金ヶ崎君に会わず顔がない。もう死にたい気分だ。

【?????】「…広沢先生？」

急に誰かに声を掛けられた。私はハアハア深い息を漏らしながら、その声の主を見た。

【広沢美咲】「神宮寺さん？」

そこにいたのは、私のクラスの生徒の一人である神宮寺紗耶さんじんみやうじつひやだった。白いマフラーを首に巻きつけ、赤いセーターを着ている。私服姿だ。

【神宮寺紗耶】「やっぱり先生だ。」

【広沢美咲】「ど、どうして、こんな夜に？」

【神宮寺紗耶】「塾の帰りですよ。期末テストが近いですし。」

【広沢美咲】「そ、そう……。」

【神宮寺紗耶】「先生こそ、どうしたんですか？ ハアハア息を切らしながら走ってきたし……。」

【広沢美咲】「じ、神宮寺さん……。こっちに、私と同じくらいの年齢で、メガネを掛けた背の高い男の人を見かけなかった？」

【神宮寺紗耶】「さあ……。この通りは、私の塾の帰り道なんです。大通りとは違って夜は人通りが少ないですし、人が歩いているとしたら、すぐに分かると思いますけれど……。」

【広沢美咲】「そ、そう……。ありがとうございます。」

【神宮寺紗耶】「何かあったんですか？」

【広沢美咲】「い、いえ、何でもなし。夜道は危ないから、気を付けて帰ってね。」

【神宮寺紗耶】「ええ、先生こそ気を付けて下さいね。この辺り、最近チンピラが出るみたいですから……。」

【広沢美咲】「ええ、気を付けるわ。」

【神宮寺紗耶】「では、明日、学校で。失礼します。」

そういって、神宮寺さんは一礼をして帰って行った。私は、捜索に戻った。

大通りに出たとしたら、もう金ヶ崎君を見つけるのは難しいだろう。一番良いのは、金ヶ崎君が住むアパートに真っ先に行くべきなのだが、彼がこちらに引越してきてから、まだ一度も遊びに行っていない。だから、場所が分からない。

金ヶ崎君は引越してから何度も私を家に遊びに来ないかと誘っ

てきてくれたが、私は断ってしまっていた。今、思えば、その事も金ヶ崎君が私に（ウソの）好きな彼がいることに確信を与えていたかもしれない。家に遊びに来ないのは、きっと私に彼氏がいるから来ないだ、って。なんでも優しい金ヶ崎君なら、きっと考えそうだ。思い返せば、他にも彼が不安になりそうな事を、私はいくつもしてきた。けれど、金ヶ崎君は何も言わなかった。私を傷つけまいと、内心、気が付かないフリをしていたのかもしれない。今も、それも全部私が悪いんだ。本当にダメな私だ。

【広沢美咲】「こういう事になるのなら、一度、遊びに行っておけば良かった…。」

でも、今、後悔しても後の祭りだ。とにかく、今は見つけ出さないと！

結局、駅や商店街など色々な場所を探したが、金ヶ崎君を見つけないことは出来なかった。

私は、力も尽きて、その場に泣き崩れた。天気も急に崩れて、どしゃぶりの雨になった。

雨に激しく濡れながらも、私はその場から動くことができなかった。私の泣く声は、悲しくも雨の音にかき消された。

今、神様に願いたい事が1つだけ叶うのなら、私は今すぐ金ヶ崎君に会いたい。だが、現実はそのもいかない。私が自ら壊してしまっただ。

もう終わった…。私の人生初めての恋愛、それが終わった…。

同じ頃、居酒屋“ふくていま”からそう遠くない公園。閑静な住宅街の一角にある少し大きな公園で、遊具もいっぱい。公衆トイレも完備されている。平日の夕方や休日の昼間などは大勢の家族連れなどで賑わうが、夜それも深夜となると誰も人影はなくなり静かな公園となる。

その公園のベンチに一人ぐったり意気消沈している若い男性の姿

があった。その男性は、つい先ほど近くの居酒屋にいた客で、片思いをしている女性に好きな男性がいたことを知り、逃げるように出てきて、気が付いたらベンチに座っていたのだ。

男性は、その女性と知り合った頃から女性の事を気になっていて、その想いが今では相手の事が一番大切なかけがえのない人にまで成長していた。だが、相手に好きな男性がいたことを知り、大きなショックを受けた。

相手にとって自分は友達でしかなかったのか…。自分は哀れな道化人形だったのか…。

【金ヶ崎慶介】「俺は、何をしていたんだろう…。」

男性は、好きな相手に恋人がいると、その女性を諦めなければならぬ性格だった。だから、今回も諦めるしかない。その女性も恋人がいることを認めている。それで自分に謝った。もう諦める以外にないのだ。だが、今まで2人で過ごした時間を思うと、そうも出来なかった。複雑な気持ちで、どうしたら良いのか分からなかった。男性は、ポケットから自分の携帯電話を取り出した。そして、おもむろに携帯で撮影した画像が入っているフォルダを開き、一枚の画像を画面に映した。その画像は、その男性と好きな女性が2人で写っている唯一のツーショット写真だった。夜のライトアップされた遊園地で撮ったもので、2人とも笑顔でピースをしている。

男性は、その画像に写った自分ではなく、その隣に写っている女性を見た。

楽しそうで可愛らしい笑顔。その笑顔は、友達として楽しんでいる笑顔だったのか…。

その笑顔を見るたび、男性は更に落ち込んだ。画像を消去しようと思ったが、それも出来なかった。結局、男性は携帯電話の電源を自ら落とした。

その時、公園の入口から誰か自分に向かってくる人影に気づいた。まさか…、と思いき少し嬉しくなって男性は顔を上げた。

しかし、そこにいたのは自分が思っていた人とは全くの別人だっ

た。暗がりによく分らないが自分より少し若い男性が1人いて、どこかの学校の制服を上下着ているが、上はボタンをかけておらず、派手なTシャツがぼろ丸見え。しかも、右手には金属バットを持ち、自分の肩をトントンと軽く叩いていた。その姿は、不良そのものだ。それを見て男性はその場から逃げようとした。しかし、もう体が言う事を効かない。そして男性は、覚悟を決めた。

不良少年は、金属バットを構え、次の瞬間、男性をバットで勢いよく振り下ろした。それは、男性の頭に命中し、その男性はそのままベンチから地面に倒れた。それでも不良少年は、構わず何度もバットで体や顔などを数発殴り続けた。そして、ついに倒れた男性は動かなくなった。それを見た男性は、バットで殴るのをやめて、片足で男性が動かなくなったのを確認すると、不良少年は倒れた男性のポケットなどを探り、男性の財布ごと盗み、倒れた男性をそのままにして、バットを持ってその場から逃げるように立ち去った。その間、わずかに数十秒の出来事だった。

倒れた男性は、その後もしばらくピクリとも動かなかった。着ていた服や顔などは血に染まっていた。

しばらくして、雨が降ってきた。冷たい雨がポロポロの体を容赦なく濡らしていく。その時、男性の手が微かだが動いた。あんなに殴られたのに、かろうじて意識があったのだ。

【金ヶ崎慶介】「…み、美咲…ちゃ…。」

その言葉を口にした男性は、力尽きて動かなくなった。

一方、男性を殴り倒した不良少年は、傘も差さずに冷たい雨に打たれながらも住宅街を逃げるように走っていた。途中、遠くから傘をさした若い女性が歩いてくる。だが、少年は気にせず、そのまま女性の横を走り去った。しかし、女性の方は一瞬、少年の顔を目撃した。その少年は、その女性もよく知っている人物だ。

【神宮寺紗耶】「…藤田君？」

振り向いたが、もう少年の姿は暗闇に消えて見えなかった。

その後、雨は、一晩中降り続いた。

その2に続く

【その1】 とんでもないヤツがやってきた！（後書き）

本作をご覧いただき、誠にありがとうございます。

本作に関するご意見・ご感想などがありましたら、お気軽にコメントして下さい。

不定期ですが、続編にご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4239z/>

学校をつくろう! ~ New Legend (ニュー・レジェンド) ~

2011年12月14日19時50分発行